平成３０年度第２回　総合教育センター運営協議会議事録（摘録）

○日　時　　平成３１年２月２１日（木）、１４時００分～１６時０５分
○場　所　　姫路市立総合教育センター　３階　講義室
○出席者　（委員）加治佐哲也、藤川洋子、永浦拡、藤原充代、荻野勝己、西井健滋
　　藤田勝子、松尾弘子、稲葉吉則、髙桑由雅、長尾茂弘
　（欠席）中島玲
　（事務局）谷田総合教育センター所長
　教育研修課：有方課長、柳井係長、北村管理指導主事、中村指導主事、
　　常城指導主事、飯田指導主事、小林指導主事、小寺指導主事、
　　城谷係長
　育成支援課：梶原課長、霞末課長補佐、長谷川係長、藤戸係長、小林管理指
　　導主事、宗野指導主事、前川指導主事、大西指導主事、萩田指
　　導主事、井上指導主事

○議事内容

所長　（開会挨拶）

事務局　（会議公開）
（定足数の報告）
（会議資料の確認）

本日の次第について。
議題として「平成３０年度センター事業の重点課題と取組の成果」、「平成３１年度に向けた事業実施方針（案）」の２つを協議いただくこととしている。
それでは会議の進行を加治佐会長にお願いする。

会長　第１回運営協議会のときに、今年度の２つの課の事業の内容と目標値を説明された。本日は、その数値を検証することと、来年度の事業についての説明である。

委員の皆様には、会議の円滑な進行にご協力をお願いする。
まず、議事の１点目「平成３０年度センター事業の重点課題と取組の成果について」を事務局から説明をお願いする。

事務局	（「平成３０年度センター事業の重点課題と取組の成果について」の説明）
会長	ただいまの説明について、ご質問・ご意見等あればご発言をお願いしたい。
会長	教育研修課と育成支援課の取組の成果について、非常に丁寧な説明があった。教職員研修の分析のところで、伺いたい。６ページの分析で、資質・能力の向上に対する研修企画の有効度が下回ったとあるが、目標値が 4.5 で実績値が 4.4 であれば、誤差の範囲であり、下回ってはいない。厳しい評価である。
事務局	そのように捉えてもらえるとありがたい。4.5 という数値にこだわると、0.1 でも達しなかったということで、下回ったとしている。それぞれの研修ごとに有効度を定めており、平均を取った数字である。できるだけ 4.5 を目指したい。課題研修など各学校から必ず１名参加してもらう悉皆研修では、自分のニーズに合っていないところもあり、評価が低くなっているのではないかと考えている。
会長	５段階なので、目標値も実績値も低くはない。これ以上、上げるのは難しいのではないか。飽和状態にも関わらず、ニーズに合っていないと分析するのは、少し理解しにくいところがある。アンケートは、受講後にすぐに取るのか。
事務局	すぐに取っている。
会長	すぐにアンケートを取ると有効度は高くなる。記名式にしているのなら、無記名にしてはどうか。
事務局	無記名にすれば、無責任なことを記入する人がいる。責任を持って記入してもらいたいので記名式にしているが、評価の面から考えると、無記名にしたほうがいいのかもしれない。今後の検討課題としたい。
会長	中高生や大学生に授業評価をさせると、無責任な回答をする人がいるので、記名式にしたほうがよい。しかし、この場合は、対象が成人であり教師である。いろいろな意見を受け止めたらいいのではないか。

１１ページの特別支援教育の分析のところで、評価指標の微減があったとあるが、これも誤差である。

事務局　今回、連携支援の手続き方法を大きく見直したので、学校の負担が大きくなった。そのことを踏まえた結果で、減ることは予想していた。

会長　その割には減っていない。

委員　研修は、記名式のほうが意識を持って受講できると思う。たとえ割当てであっても意識を持って受講すれば、必ずいい研修になる。一般教師はなかなか忙しく、資料作成まではできないが、教頭が受講した際には、必ず資料を作成して報告するように指導している。中でも、教頭が平成３２年に設置される学校運営協議会についての研修を受講したときのことが、印象に残っている。受講後に教頭から、これからの学校運営はこうあるべきであるという熱心な説明があった。記名式であれば、研修の内容に対しても、いい印象を持てる。

会長　研修を、記名式にしたほうがいいという意見も出た。

委員　特別支援学校の立場で話したい。毎年、書写養護学校の先生が初任者研修に参加しているが、研修に対して非常に配慮してもらい、うれしく思っている。書写養護学校の体育館を使用して研修し、我が校の先生が発表できる機会も与えてもらっている。市立の特別支援学校は１校しかないので、小中学校の様子がわからない中、疎外感のないように配慮があり、喜んでいる。初任者が授業をした際、教育研修課の指導主事が見に来てくれた。それに対してコメントももらい、とても励みになった。いずれ小中学校にも配置になる先生たちなので、次に異動したときにスムーズに適応できると思っている。

また、教育メッセに３名の先生が、教材教具を出展した。そのうち２名が優良賞と奨励賞を受賞し、全体の場で表彰してもらった。１校しかないため、なかなか名前が出ることも少ないが、学校名や先生の名前を知ってもらういい機会となった。先生のモチベーションも上がり、非常に感謝している。

次に、先程紹介があったロボホンについてであるが、書写養護学校にも小学部があるので、保護者からロボホンのことを聞かれた。

保護者はとても敏感なので、可能であれば小学部にも何らかの形で導

入してほしい。先生たちはICTをかなり活用している。肢体不自由の子供の教育とICTは、親和性が高く有効であると思っている。１校しかないからこそ、予算を使っていただき、研究の材料としてもらいたい。

事務局　教育研修課の業務について、褒めていただき有難い。ロボホンは、電子黒板の付属品として小学校に導入している。特別支援学校には電子黒板を導入していないが、ロボホンを期間限定で貸出することも検討していきたい。

また、初任者研修について、姫路市で１３日担当しているが、そのうち１日を書写養護学校に行って研修する機会を設けている。特別支援教育は、初任者にとって非常に大切な部分である。書写養護学校が協力してくれていることに、大変感謝している。

会長　ロボホンは、プログラミング教育で活用しているのか。

事務局　将来的には、プログラミング教育で活用したいと思っている。

会長　プログラムを作って、ロボットを動かせるのか。

事務局　２月１３日に各学校に配布したばかりで、まだそこまでは進んでいない。

委員　小学校にロボホンが導入されて、まだ１週間しか経っていないが、子供たちの人気者である。ロボホンは賢くて、子供たちと双方向の会話ができる。また、職員全員の顔を認証させたら、「校長先生、ここにいるんだね。」というようなことも言う。いろいろな可能性を秘めており、とても楽しませてもらっている。

授業を充実させるための校内研修はとても大事である。それを支援してくれている教育研修課には感謝している。

育成支援課とも関係するが、来年度は、通常学級に入っている配慮を要する子供たちへの対応研修や、ユニバーサルな授業、また授業に入りにくい子供への指導方法等の研修を考えてほしい。

事務局　検討させてほしい。初任者研修や年次研修の中にも、配慮を要する子供たちへの対応研修を１コマでも入れていきたい。

委員　こども家庭センターの立場から、お願いしたい。昨今、虐待の死亡事件が続いている。野田市の事件を受けて、登校できていない子供たちの安全点検が全国で展開されている。我々の相談所で関わっている子供たちの安全も、１か月以内に点検するよう指示が出ている。

家庭センターで取扱っている事案を、何らかの研修の中で先生に説明できればいいと思っているがどうか。

事務局　今年度、初任者対象にこども支援課の市政出前講座で、「オレンジリボンをご存知ですか？」という児童虐待防止に関する基礎的な講座を設けた。また、男女共同参画推進センターの講座で「ＤＶ防止」そこから発展して「面前ＤＶに関する予防防止」に関する講座を設けた。

併せて、初任者研修以外でも、養護教諭研修の中で児童虐待に焦点を当てた講座を１コマ設けた。担任や養護教諭は、アンテナを一番高く持たなければいけないという立場にあるので、来年度も同じように工夫していきたい。

委員　市役所の研修だけでは足りないと思っている。我々が専門家であるという自負ではなく、市役所が扱う児童虐待と見守りは、我々がやっていることとは違う。学校の先生にお願いしたいこともあるので、専門的な立場から研修をさせてほしい。

事務局　いいご意見をいただいたので、前向きに検討したい。

委員　幼稚園の立場から言いたい。幼稚園に書画カメラを配布してもらえると聞いた。活用度が高まり、授業に活かすことができるので、子供たちの好奇心も旺盛になると思う。

また、特別支援教育のことであるが、支援が必要な子供の受入れが増えてきている。連携支援の手続き方法が変わっても、必要なことなので申請はしていくが、申請書はできるだけ簡素化してもらいたい。

委員　高校の立場から言いたい。研修一覧を見ると、夏休み中にぜひ職員に受講させたい研修がたくさん揃っている。高校は夏休み中でも、三者面談や補習などの行事があり、受講したくても受講できないのが、現状である。校長として、そのような悩みを抱えていることを、伝えておきたい。

１０ページの相談件数の表であるが、高校の電話相談件数や来所相談

件数も意外と多い。ここでのやり取りを素材とした研修は計画できないか。相談内容や対応の仕方にも関心があるので、研修を計画してもらえると有難い。

事務局　育成支援課では、高校の相談もたくさん受けている。不登校や継続的な相談が増えてきている。特別な研修として学校にフィードバックするのは難しいが、一般的な研修の中で考えていきたい。相談件数には、市立高校の生徒だけでなく、姫路市内に住民票のある県立高校の生徒の相談も含まれていることを申し添えたい。

委員　英語のデジタル教科書は、使いやすく活用率が高い。他の教科もデジタル教科書を使えば、授業を効率的に行うことができ、もっと深く入っていける。デジタル教科書をアピールしたり、使用方法の研修をしたりしたほうが、活用率が上がり、効率的かつ中身の深い授業改善に繋がるのではないか。

事務局　貴重なご意見有難い。教育研修課には、ICT 担当の指導主事が２名いる。各教科の担当者会に出向き、デジタル教科書のより有効な使い方の研修ができればいいと考えている。予算の関係で、今年は英語と国語と社会を入れているが、一番活用率が高いのは英語である。評価指標の上段、デジタル教科書を効果的に活用している教員の割合は、小中学校合わせての数字である。また、下段はデジタル教科書だけでなく ICT 機器を活用している教職員の割合で、小中学校を別々にあげている。中学校は、前年度より１０％上がっている。来年度はもっと伸びるのではないかと思っている。

会長　それでは、議題の２番目「平成３１年度に向けた事業実施方針（案)」について、事務局より説明をお願いする。

事務局　（平成３１年度に向けた事業実施方針（案）を説明）

会長　事務局から平成３１年度に向けた事業実施方針（案）について説明いただいた。ご質問・ご意見等あればご発言をお願いしたい。

委員　幼稚園から小学校に繋ぐという意味で、連携した取組をしたいと思っ

ている。幼稚園と小中高等学校担当者が、一緒に研修を受けることはできないか。

事務局　高校までは無理だが、幼小中と繋がっているところは、一緒に受けることができるような研修や講師についても考えていきたい。

委員　大阪市では、お金を学校に予算化し、それを活用して研修をしていると聞いた。姫路市でも予算化してもらい、学校のニーズに合った研修を独自でやっていくということはできないか。

事務局　学校への予算化は、教育委員会全体のことなので難しい。教育研修課が学校を支援する事業として、教育実践研究助成がある。３０万円助成できる学校を１校、１０万円助成できる学校を２校としている。書写養護学校には、平成２７年度から２９年度までの３年間、毎年３０万円を助成した。過去に助成を受けているので、応募が多ければ３０万円の枠は難しいと思うが、１０万円助成に応募してもらったら検討の余地はある。

委員　不登校児童が増えてきている。適応指導教室にも出向けないケースがある。スクールカウンセラーを各校１名配置してほしい。また、通級指導の先生が姫路市の小学校には７名しかいない。通級指導の先生の育成が必要ではないか。

事務局　県へ働きかけをしていかなくてはいけない。不登校加配というものがあるが、実際、加配されている学校は少ない。私が校長であった時の経験では、電話が鳴っていても職員室には職員が誰もいないという状況があった。教職員もぎりぎりの人数しか配置されていないことは理解してほしい。

具体的には決まっていないが、適応指導教室を各地域で少しずつ増やしていきたいという強い思いを持っており、検討しているところである。

確かに、支援が必要な子供は増えてきている。昔は、周りの子供たちがその子供と一緒に頑張っていこうという思いで、必死に頑張ってきた。完璧なことはできないが、教師と周りの子供たちも、一緒に伸びていくのだという強い思いで助け合ってきたことを覚えている。支援が必要な子供は、支援員にまかせておけばよいというような意識を、周りの子供たちが持ってしまわないように気を付けなければいけない。加配するこ

とも大事ではあるが、担任にも、頑張って一緒に高まっていくという意識を持ってほしい。

委員　臨床心理士としての立場で話したい。ここ１０年、臨床心理士に求められているのは、予防教育である。ストレスマネジメント等を高めることで、学校へ行くのがしんどくなったときに、誰かに相談できる力や自分で解決する力を育んで行こうというものである。２０１９年４月に公認心理士という新しい資格が誕生する。その職務の中に、心の健康に関する知識を深め、教育をするべきであると定められている。年に１回、教育の予防プログラムを実施することも、県の教育委員会から義務付けられている。我々も学校のニーズに応えられるよう、協力しながら取り組んでいきたい。

委員　ICT の活用は必要なことであると思うが、読書離れが進んでいる。学校も辞書を調べたりする学習に取り組んでいるが、ICT ばかりが進んでおり、親としてはバランスが難しいように思う。画面ばかり見るので、目や脳への影響も気になる。健康被害のことも考えながら、ICT を進めて行ってほしい。

事務局　教育研修課は、教育の情報化を進めている。また、市役所本庁の学校指導課では、調べる力育成プロジェクトを進めており、子供たちが読書や調べ学習を通して、考察し考えをまとめていくという教育も進めている。各学校の図書室には、学校司書を配置し、読むべき本を紹介し調べ方の指導もしている。教育委員会としては、２本立てで両課協力しながら進めている。健康被害については、健康教育課という部署もあるので、情報を入手したい。

会長　文部科学省が目指すソサエティ 5.0 とは、個別最適化である。個性に応じた学びができるということである。そのためには、ICT やロボットが必然になってくる。紙では対応できないので、当面の課題である。

副会長　国立大学でアクセシビリティ・コミュニケーション支援センターの責任者をしている。書写養護学校の校長先生の話が身にしみてよく分かった。私の大学は、理系の単科大学であり、偏差値の高い学生が入学してくる。２次試験に国語がないので、すでにアスペルガー症候群、自閉症スペクトラムの診断を持って入学してくる学生もいる。２０１６年に改

正された発達障害者支援法の理念は、子供の一貫したサポートである。障害は個性であり、恥ずかしいことではない。障害者手帳を持っていると、優良企業から障害者枠で採用したいとか、インターンシップに来てほしい等のオファーもかなり来る。障害は隠すことではないことを親御さんにも伝えたい。そういう時代になってきていることを、この場を借りて言っておきたい。

会長　　３０年度の評価は、よく出来ている。ＰＤＣＡサイクルで言うと、チェックが評価であり、アクションが事業実施方針である。チェックとアクションの関係をもっと明確に示したほうがいい。良い結果が出たものについてはもっと伸ばせるような取組を、新たに課題が出てきたものは、別の目標を設定したというような示し方をすればいいのではないか。
　来年度に期待したい。

　それでは、以上をもって本日の議事を終了する。皆様には会の進行にご協力をいただきありがたかった。
　それでは進行を事務局にお返しする。

事務局　　加治佐会長をはじめ、委員の皆様方には、熱心なご協議を賜り、誠にありがたかった。以上を持って、閉会する。

１６時０５分終了